

令和3年度(2021年度)伊丹市立松崎中学校 自己評価・学校関係者評価

1 校訓

盡 己

2 学校教育目標

すべてのことに全力で取り組む生徒の育成

3 本年度の経営方針

校訓「盡己」の具現化をめざして、授業、行事、部活動を教育活動の3本柱とし、「一生懸命勉強する」「優しい心を持つ」「感動する」生徒を育成する

4 自己評価結果

目標	アンケート番号			評価の観点	評価項目	取組と成果	各観点 の評価	目標達 成度	課題・改善方策
	生徒	保護者	教職員						
「一生懸命勉強する」 生徒の育成	④ ～ ⑥	② ～ ④	④ ～ ⑥	①学力が身につく 授業実践	教員の授業力向上	【取り組み】 ・学習の手引きの見直しを行い、学習の見通しが持てるようにした。 ・校内研究授業を三回実施した。 ・教科部会を定期的にもち、よりよい授業づくりを目指して教科内で協議した。 ・授業アンケートを毎学期取り、生徒の意見を聞き、授業改善に努めた。 ・効果的な「ふり返り」について研修を行い、そのあり方について共通理解を図った。 ・ICT研修を行い、ipadを使った授業づくりを推進した。 【成果】 ・「授業は楽しく、わかりやすい」という問いに肯定的な回答をしている生徒が令和2年度は72.2%であったのに対し、令和3年度は85.1%と、約13ポイント上がっている。 ・「先生はいろいろ工夫して教えてくれる」という問いに肯定的な回答をしている生徒が令和2年度は88.6%であったのに対し、令和3年度は95%と、約6.4ポイント上がっている。 ・「授業内容でわかりにくいことについて、先生に質問しやすい」という問いに肯定的な回答をした生徒が、令和2年度は66%であったのに対し、令和3年度も74.3%と、約8.3%上がっている。「ふり返り」として、ふり返りシートに生徒が書いた「問い」を授業に反映したことで、肯定的な意見が増えたと考えられる。	3		【課題】 ・教師からの「問い」がまだ多く、生徒が受動的になっている。そのため、生徒がどのような「問い」を持てばよいのか、自ら考える力が養われていない。 ・保護者アンケートの「子どもは楽しく学校生活を送っている」の肯定的評価は昨年と同じだが、「よくあてはまる」が下がっている。オープンスクールや保護者が参観できる行事が実施できていないことが原因としてあげられる。 【改善方策】 ・生徒が能動的に考えられるように授業改善を行う。「ふり返り」で生徒がどのように考えていけばよいのかを示し、生徒自身がふり返りを行うなかで、自ら「問い」を持てるように学校全体で取り組んでいく。 ・評価の観点が変わったことで、評価方法に自信を持ってない教師がいる。来年度、評価について研修をもつ機会を設け、指導と評価の一体化が図れるように取り組んでいく。 ・学校でどんな教育を行っているのか。どんな授業をしているのかを見てもらえる機会が増えるように考え、少しでも学校の教育活動が地域・保護者へ伝わるような取り組みを考える。
					計画性を持った研修の実施	【取り組み】 ・学びたい研修内容のアンケートを取り、夏季研修会を行った。 ・プチ研を8回企画し、教員の資質向上につなげた。 ・ICT研修は、総合教育センター指導主事など、外部講師を招き、積極的に進めた。 【成果】 ・校内研修会では、教科を中心としたグループで、話し合いが活発に行われた。 ・ICT研修は教員のタブレットへの苦手意識を取り除ききっかけになった。			
					深い学びを実感させる授業実践	【取り組み】 ・授業の「目標」を提示し、「ふり返り」の場を意識して設定した。 ・授業のなかで生徒自らが「問い」を持てる授業を行った。 【成果】 ・生徒アンケートの「授業は楽しく分かりやすい」に対する肯定的な意見が多くなった。タブレットの活用が生徒の意欲を高めている。			

「一生懸命勉強する」 生徒の育成	⑦	⑤		②読書活動	図書室の整備	・学校司書と図書ボランティアにより、月に1度季節に合った展示を工夫した。 生徒たちは毎月楽しみにしており、生徒自ら作成しが参加する展示もある。 ・新着本を図書館だよりや掲示物で通知したり、展示場所を工夫することで、生徒が新着本に興味を強く示すようになった。 ・図書委員会で「推し本コーナー」を作り、装飾や紹介したい本を展示することで読書を啓発した。 ・図書委員会で、評議専門委員会終了後に本の整理を行っている。	4	・コロナウイルスの影響で学年ごとの分散開館を行っているが、多い学年では来館者が平均50名ほどになることもある。図書室への来館者は多く、貸出冊数は1月現在でまもなく10,000冊を迎える。 ・コロナウイルスの影響で、授業での図書室利用がされていない現状がある。授業での利用が出来るよう、時間割の調整を図るなどし、活用促進していきたい。 ・今後バーコードの貼り替えをすすめ、さらに本の管理方法を整備したい。 ・読書のために本を自分で購入する生徒も多数おり、決まった生徒が図書室を訪れる傾向が強い。リクエストや予約の制度をさらに浸透させることで、来館者を増やしたい。	
	⑬ ⑭	⑩ ⑪	⑪	③進路指導	進路指導体制の充実	・進路希望調査を計6回実施し、生徒と保護者の間で進路について話し合い、考える機会を多く設定した。 ・経験の浅い担任は、予備懇談前や懇談前に1人1人の進路について進路指導主事や経験豊富な担任と実現可能性や能力・適性に合っているかの相談をし、自信を持って懇談ができる体制を整えられた。 ・タブレットを用いて、学校からもオープンハイスクールの申し込みを行った。	3	【課題】 ・新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、公立高校のオープンハイスクールが中止となったことで、志望する高校について十分把握したとは言えない。 ・新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、本来2回対面で行う予定だった保護者対象進路説明会が1度のみ、更に遠隔配信になってしまった。	
					生徒・保護者への情報提供	・進路通信を発行し、最新の情報を発信した。 ・遠隔配信の形にはなったが、保護者を学校に招いての進路説明会を実施することができた。 ・「進路指導からのお知らせ」を教室掲示・廊下掲示を行い、進路に関する情報通知・連絡を行った。		【改善方法】 ・オープンハイスクールに参加できなかった生徒には、「休日に一度行ってみなさい」とアクセスの確認、及び高校ホームページを隅々まで読むことで情報収集するように指導を行った。翌年以降は、中止になる可能性を踏まえ、もっと早い段階からオープンハイスクールに参加するように指導する必要がある。 ・進路説明会をYouTubeの限定公開機能を活用して動画配信するなど、緊急事態宣言等で保護者を学校に招けない状態の際には、活用を考える必要がある。	
		④		④学習タイム	系統的・継続した実施	・各学期のテスト前に実施した。 ・五教科が一回ずつ時間を確保できるように割り当てを行った。 ・3年生のみ、受験対策として11月下旬から断続的に学習タイムを実施した。 ・生徒は、テストに向けて意欲的に学習へ取り組めた。	3		
学校関係者の意見				【良い点】		【課題】		【改善策】	
				・先生方の工夫や努力を感じる。成果が出ることで生徒も自己肯定感を持てている。 ・教師の校内研修は継続してほしい。 ・ふり返りを実施できる時間の確保 ・見える化(情報の開示)に取り組まれていること ・様々な工夫をされていて、アンケート結果も数値が上がり、結果として表れていると感じました。 ・学習指導方法に工夫を加え、授業改善に努め効果的な「ふりかえり」をされたことは、学力向上に対する学校の努力が見られます。 ・「授業が楽しく、わかりやすい」「先生はいろいろ工夫して教えてくれる」「先生に質問しやすい」など生徒の反応がよくわかる。 ・SNSなど情報の飛び交う中での読書は本当に難しいと思います。短い時間でも読書の楽しさを会得した子供は、自分の考えや意見を言えるようになると思います。 ・授業時間内に「ふりかえり」の時間を持って、生徒の自宅での学習に結び付けようとされたこと。 ・GTを設けることで、生徒の学習意欲をくすぐることができたこと。		・ICT・タブレットに対しての関心、必要性の理解度に温度差が感じられる。 ・アンケート結果で良くなかった生徒たちのフォローをどうしていくのか。 ・今、学んでいる事がわかれば楽しいはずです。授業の中身を生徒がどれだけ理解し自分のものにしていくか。「振り返り」を有効に取り組んでください。 ・将来の夢、自分のやりたいことを探す年代です。多くのことを教えてあげて欲しい。自分で決めることができるように。 ・生徒は自己肯定感が低いと感じています。「一生懸命続ける目標」の取り組みで自信をつけることができると期待しています。 ・考えや意見は持っているが自分から伝え、表現する力をつけてあげてください。 ・読書量が増えたことが、即、長文を読み解く力に結びついたり、テスト問題文の言わんとすることを的確に把握することにつながったり…とは必ずしも言えない気がします。土曜学習教室に通ってくる生徒の中には、わからない単語があっても気にしないという子もいます。また、土曜学習教室参加者を見ると、特に数学において、難問にトライするよりは、比較的簡単な問題から中級程度の問題に取り組ませて「解けた」「わかった」と達成感を持ってもらうことが必要な生徒が多いように感じます。		・新しいことに取り組むとストレスを感じることにつながると思うが、ある程度のストレスは、事前に理解・覚悟して取り組む。 ・生徒の声を聞いてみてほしい。 ・自己評価にあるように、生徒が受け身ではなく自分から進んで取り組めるような学習環境を作ってあげてください。 ・学習内容は、何のためにこの勉強するのかを先に提示して、授業に取り組むのも必要になってくると思います。 ・この勉強は、自分が将来目指す資質や能力に必要なことを生徒自ら気づくように。 ・自分の良いところに気づかないのは、年齢的なものもあると思います。大人が良いところや可能性を伝えることで安心します。 ・漢字や単語などの意味が定かではなくても読み飛ばして理解できる生徒なら問題はないですが、全員が全員、そういうわけではないと思います。面倒くさがる生徒は多いかもしれませんが、予習段階で国語の教科書に記載されている意味を読んでおしまいというよりは、辞書とお友達になれるよう促すことも必要なのではないでしょうか。この点は、英語でも同様ではないかと思います。 ・全員を同じ舞台に立たせて同じ内容に取り組ませるのであれば、勉強が苦手な生徒は、解けなくて当然という見方をしてしまうこともあるので、その子その子のレベルに応じた課題を考えてやれるとベストなのではないでしょうか。 同じ内容に取り組ませるのであれば、難のある生徒は、ついていけないというか、解けなくて当然という見方をすることもできます。	

目標	アンケート番号			評価の観点	評価項目	取組と成果	各観点 の評価	目標達 成度	課題・改善方策
	生徒	保護者	教職員						
「優しい心を持つ」「感動する」生徒の育成				①部活動	部活動の活性化	・総合体育大会では、3つの部活動、新入大会では5つの部活動が阪神大会で入賞を果たし県大会へコマを進めた。 ・ノー部活デー（毎週平日と休日に1日ずつ）を設定して、適度な休養を設け、けがの防止や効率的な体力の向上に努めた。 ・Zoomでの集会や体育館での表彰を通して活動実績を紹介し、全校生で共有することができた。また、学校便りにも活動実績を掲載している。 ・新入生に向けて部活動紹介を行い、仮入部期間を長くすることにより、安心して入部できる体制を構築した。	3		【課題】 ・新型コロナウイルスに感染症による活動停止期間や活動時間の制限、また学級、学年閉鎖等により、継続的な指導が難しくなっている。 【改善方策】 ・部活動の意義を伝え、継続する事により得る力や達成感、充実感を感じられるように指導する。 ・感染対策を徹底し、限られた時間の中で、計画的に実施する。
					部活動をとおして培う仲間づくり	・部活動加入率は、85%となり、昨年度80%から増加した。 ・今年度も新型コロナウイルス感染症に伴い、例年のように地域行事に参加する機会を与える事が減ったが、近隣の中学校や、地域の小学生と交流した。			
	③	③	③	②学校行事	生徒の自己存在感、充実感、達成感の育成	・「学校行事は楽しい」と解答した生徒は90.1%となっており、昨年度の87.8%と比べて大きく上がっている。コロナ渦で制限のある中で、多くの生徒が前向きに取り組むことができた。 ・「子どもは学校行事に積極的に参加している」と回答した保護者は91.5%であり、昨年度の88.9%と比べて上がっている。生徒と保護者、教師が協力し、充実した行事をつくりあげる手立てを考え、取り組む事ができた。	3		【課題】 ・生徒と保護者がより自己存在感、充実感、達成感を感じるための行事の育成。 ・感染症の流行により、行事の実施方法や行程を急遽変更する事が多い。 【改善方策】 ・教師主体ではなく、生徒主体になれるような行事の企画を行う。 ・行事の準備期間や実施中に、計画の見直しが必要になる事を踏まえて計画する。また、過去の実施方法にとらわれず、安全面や感染症対策を十分とれるように、柔軟な考えをもって計画、実施する。
	⑩ ⑪	⑦ ⑧	⑦ ⑧	③生徒指導	生徒指導体制の整備	・教員の空き時間における校内巡視を行った。 ・スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、関係機関と連携して生徒と関わりを持つことができた。 ・ふれあい相談員を活用し、校内巡視、家庭訪問、別室対応など多岐にわたって連携することができた。 ・週1回の生徒指導委員会での内容を、学年会等で伝達し、共通理解のもと指導、対応することができた。 ・生徒指導事案が発生した後、迅速に学年職員で情報共有する場を設定することができた。 ・生徒情報フォルダを作成し、どの職員も個々の生徒への指導内容を把握することができた。 ・担任や部活動顧問だけが抱え込むのではなく、学年生徒指導、学年主任、生徒指導主任、管理職が連携し、組織的な対応を行うことができた。 ・生徒会本部役員、PTA執行部と連携して校則の改正や、制服の改定をすすめることができた。	3		【課題】 ・長期欠席者（20日以上欠席）の数が73人（R3,12月末現在） ・「学校へ行くのが楽しい」と回答した生徒の割合が82%で、約20%の生徒が否定的な考えを持っている。 ・「先生は一貫した適切な指導を行っている」と回答した保護者の割合が85.5%であった。14.5%の保護者が否定的な考えを持っている。 ・「子どもの生活の様子等をよく把握している」と回答した保護者の割合が89%であった。11%の保護者が否定的な考えを持っている。 ・「学校は、問題行動に対する指導体制が整備されている」と回答した教師が80%であった。20%の教師が否定的な考えを持っている。 ・学校評価アンケートにおいて、肯定的な回答の割合は昨年度と比べ、微増したが、いじめ、問題行動、SNSなどのトラブル件数は例年と同程度発生している。 【改善方策】 ・長期欠席者については学年職員を中心に本人、保護者との面談を通し、少しでも生徒が登校できる方法を模索し、別室登校、時差登校、関係機関との連携による心のケアを促し、登校につなげる。 ・生徒が学校に前向きな気持ちになれるよう、複数の職員で多方面から個々の生徒に関わるよう心がける。また、傾聴的な姿勢で生徒と接し、生徒との距離を縮めていく。 ・学年会や職員会議の際、生徒指導委員会と協議した内容（他学年の生徒の様子、他校の生徒状況等）を情報共有する。 ・重大事案が発生した際は、事後に研修会等を実施し、生徒指導体制の確認や改善を全職員で行う。 ・職員が協力し合い、授業や学校行事を充実させ、生徒1人1人が集団意識を自覚し、心を耕せるよう努める。
					いじめ、問題行動への迅速な対応	・学期に1回いじめアンケート調査、教育相談を行い、生徒の実態把握に努めることができた。 ・いじめ対策委員会を定期的に開催し、学年の現状を情報共有したり、今後の取組について協議することができた。 ・いじめ防止強化週間（年2回実施）では、生徒会本部と連携して挨拶運動（グリーティングフラワー）や、学級での交友行動（メッセージカードの交換）を通じて生徒の仲間意識を向上させることができた。 ・携帯、スマートフォンによるいじめ、問題行動防止に向けた講演会を実施した。また、近年増加傾向にある薬物の使用を防止する講演会も実施した。 ・週に1回、生徒の心境を知る（ニコちゃんマーク）ことで、トラブルの未然防止や心の変化に気がつくことができた。 ・いじめや問題行動が発生した際は、職員間で連携して被害生徒、加害生徒への聞きとりを行い、再発防止に努めた。			

「優しい心を持つ」「感動する」生徒の育成					不登校への計画的な対応	・関係機関と連携しながら、個々の生徒に合わせた指導を行うことができた。 ・「教育支援センターやまびこ」と密に連絡をとることができた。 ・別室利用するにあたっての流れ(手順)を明確化した。 ・別室登校や時差登校(放課後登校含む)をすすめ、登校を促すことができた。 ・別室利用生徒一覧表を活用し、別室利用生徒の状況を全職員が把握できるようにした。 ・別室利用の生徒向けに、記録表を作成することで、担任、生徒指導担当が別室登校生の学習内容を把握しやすようにした。 ・不登校支援事業を活用し、登校渋りの傾向がある生徒と深くつながることができた。	3	
					家庭との連携	・電話連絡、家庭訪問、教育相談等を徹底することができた。 ・生徒の学校での様子、家庭での様子を情報共有することができた。		
	⑫	⑨	⑨ ⑩	④教育相談	生徒理解のための取組	・学期に1回教育相談週間を設け、事前に記入した教育相談アンケートをもとに担任が面談を実施し、生徒のメンタル面の状況把握に努めた。 ・QUを6月と11月に行い、生徒の心的変化の早期発見につなげるようにした。そして、これらの情報を学年会議などで共有を図っている。	3	【課題】 ・生徒は「先生は生徒の悩みや不安に対して相談にのってくれる」というアンケート項目に対する肯定的な回答が多いのに対し、保護者に対する「学校に子どものことについて相談できる先生がいる」という項目の肯定的な割合が低く、生徒と保護者の回答に差が見られる。 【改善方策】 ・保護者に対しては引き続きあらゆる機会を通じて、本校の相談体制の説明を行う。 ・問題が発生したときにだけ連絡するのではなく、普段から些細な変化についても保護者と共有する機会を増やしていく。 ・教師側は一人ひとりが自発的な研修等を通じて見識や視野を広げ、教養を深めることでより深く生徒との信頼関係を構築できるように努める。
					スクールカウンセラー等との連携	・生徒や保護者に対するカウンセリング、教師へのコーチングを週1回の訪問日に行い、適切な助言を受けることができた。 ・SSWによる教師への助言、ケース会議の実施、週1回の生徒指導委員会での情報提供などで就学困難生徒への援助をより細かく実施することができた。 ・さらに、伊丹こども福祉課、川西こども家庭センターとも連携を密にすることができた。		
			⑮ ⑯	⑤特別支援教育	指導体制の確立	・特別支援教育コーディネーターを中心に教育支援委員会を開き、支援の必要な生徒の実態把握や支援の方向性の検討を行った。 ・特別支援教育支援員が、通常学級にいる支援を要する生徒に対して計画的な支援を行い、支援状況を学級担任、教科担任に活動報告として伝え、指導に活用した。対象生徒に対し必要な支援を行うことができた。 ・中学校でも個別の指導が必要な生徒には、特別支援教育支援員による支援や通級指導を選択肢の一つとして保護者に提案した。 ・医療発達相談や巡回相談を積極的に活用し、学習に困難を抱える生徒に適切な支援を行えるよう、専門的な立場からアドバイスを受け、生徒理解を深めることにつなげた。 ・特別支援教育についての職員研修を行い、その指導について職員の理解を深める時間をもった。定期的な研修の成果として、職員の理解が深まっていると感じる。 ・生徒が抱える問題に適切に対応するため、SC、SSW、少年愛護センターなど、関係機関と連携し、必要な支援を行った。	3	
					個別の指導計画の作成	・特別支援学級生、通級指導を受ける生徒、作成を希望する保護者の生徒については、個別の指導計画を作成した。学期ごとに現状を振り返り、目標や支援内容を見直した。 ・作成した個別の指導計画は、3年間の支援内容と成長の記録を卒業前にまとめ直し、教育支援計画として進路先に引き継ぐ。		

【課題】
 ・生徒は「先生は生徒の悩みや不安に対して相談にのってくれる」というアンケート項目に対する肯定的な回答が多いのに対し、保護者に対する「学校に子どものことについて相談できる先生がいる」という項目の肯定的な割合が低く、生徒と保護者の回答に差が見られる。

【改善方策】
 ・保護者に対しては引き続きあらゆる機会を通じて、本校の相談体制の説明を行う。
 ・問題が発生したときにだけ連絡するのではなく、普段から些細な変化についても保護者と共有する機会を増やしていく。
 ・教師側は一人ひとりが自発的な研修等を通じて見識や視野を広げ、教養を深めることでより深く生徒との信頼関係を構築できるように努める。

【課題】
 ・通常学級に支援を要する生徒が多く、支援が追いつかない現状がある。

【改善方策】
 ・現在は支援が必要な生徒に対する個別の支援が主であるが、今後は各学級担任や教科担任が、集団の中でそのような支援をしていく必要がある。職員全体への研修が大切である。
 ・特別支援教育支援員は1年生全クラスに入っているの、支援員からの意見や見立てを学年に反映させ、支援対象生徒について学年会で協議する。また、対象生徒の見直しも適宜行う。

「優しい心を持つ」「感動する」生徒の育成	② ③ ⑦ ⑧ ⑮ ⑱	② ③ ⑤ ⑮ ⑱ ⑳	③ ⑮ ⑲ ㉔	⑥生徒会活動	生徒会活動の活性化	・限られた状況下で学校運営へ参加し、自己有用感や学校の一員である自覚を育成した。 ・毎朝、生徒会役員が挨拶運動、国旗・市旗・校旗の掲揚を行った。 ・各クラスの評議と美化委員は朝清掃を、風紀委員は挨拶運動を曜日交代で行った。 ・自治活動の継続のため、全校集会の司会、整列・退場指示を生徒会役員が行った。 ・生徒総会や会長の話を通して、全校生徒が生徒会の一員であること意識づけた。 ・生徒会本部や各委員会が主体となった取り組みを進めることで、企画力や実行力をもったリーダー育成を目指した。 ・いじめ防止強化週間で「Greeting Cup」および「Greeting Letter」を企画・実施した。 ・行事での進行や毎月の評議専門委員会を計画的に実施した。 ・夏季休業中にリーダーズセミナーに参加し、市内の各中学校の生徒会本部役員と協力して、「いじめ防止宣言」を作成した。 ・生徒会や委員会の活動が学校生活の支えであることを意識づけ、生徒会活動を極力実施するようにした。 ・オンラインによる生徒総会や生徒会選挙、全校集会を実施した。 ・保健委員会を中心として、各委員会の活動において感染症予防に対応した活動を盛り込んだ。	3	【課題】 ・コロナ禍において、生徒会活動自体と生徒主体的な取り組みをする機会が減った。 ・実施されなかった行事の継承性の確保。 ・保健委員会の負担の軽減。 【改善方法】 ・可能な限り生徒会活動を実施し、生徒が主体的に取り組める機会を増やす。 ・思いやりの心や自尊感情を高める取り組みを実施する。 ・継承すべきものは継承するが、新しいものを作り上げていく精神で取り組む。 ・給食委員会の設立を視野に入れ、生徒会本部役員が中心となり、仕事内容などの協議を行っていく。
	⑮	⑬	⑬	⑦健全な食生活	早寝・早起き・朝ごはんへの取組	・教科指導において、偏りなく栄養摂取ができるバランスのよい食事について食育指導を行った。 ・「早寝・早起き・朝食、規則正しい生活」については、生徒アンケートでは、一昨年度が81.6%、昨年度が76.1%であったが、今年度は88.1%と上昇している。保護者アンケートでも、一昨年度、昨年度ともに70.8%であったが、今年度は、75%と上昇している。	3	【課題】 給食指導や保健指導などを通して朝ご飯の大切さや規則正しい生活を呼びかけているが、十分とは言えない。生徒たちの家庭での生活を更に把握し対応していく必要がある。 【改善方策】 ・睡眠時間や朝ご飯を食べているかなど、生徒の生活実態の把握。 ・規則正しい生活の重要性の指導 ・PTAと協力した、「早寝・早起き・朝ごはん」の啓発活動を行う。
学校関係者の意見				【良い点】 ・生徒指導案件の多い中、学校や社会のルールやマナーについて、以前より生徒がしっかり学習し関心を持っているように思う。 ・長期欠席生徒数が多く気になるが、教師一人で悩まず、生徒情報フォルダーを作成し、どの職員とも情報共有しているのがよい。 ・教師が不登校生徒の家庭訪問しているのを見かけますが、その保護者が「先生が来てくれるので安心する」と聞いたことがある。先生方の努力を応援する(業務負担にならなければ良いが) ・生徒自身が行事を楽しみ、主体的に取り組んでいるのがわかる。 ・生徒本人が責任を持って行動するようによく考えられていると思う。 ・部活動、学校行事などへの先生方の尽力により充実した活動を行っていただけている。 ・部活動加入率の増加 ・「学校行事は楽しい」と答えている生徒、「子供を積極的に学校行事に参加している」と回答している保護者 ・生徒指導は1人で抱え込むのではなく、学年指導、管理職と連携し対応する。報告連絡相談 ・不登校生徒への対応、スクールカウンセラー等との連携 ・特別支援の必要な生徒の実態把握や支援 ・コロナ禍にあっても、モチベーション高く、多くの部活動が良い成績を収めているということ。生徒はもちろん、指導に当たる先生方の思いや尽力が伝わってきます。 ・多忙を極める中で、先生方が、長期欠席者とかかわりについて、関係機関と連携して、取り組んできておられること、頭が下がります。 ・市内トップの部活動はなんとしても維持すべきで、評価に値する。 ・工夫された学校行事の開催	【課題】 ・部活動について、全国的に見ると強制的加入的な意見が見られ出した。今後の影響を考える時期なのかもしれない。 ・先生の人手不足 ・人を大切にする教育。他者から認められることで自尊感情が高まり自分を大切に思う心が育ち、他者も大切にする心をどう育てるか。 ・学校行事や部活動で得る達成感や仲間との連帯感も重要であり、学校行事や部活動を楽しく思う生徒を100%に近づけて欲しい。 ・長期欠席者73人、「学校が楽しくない」約20%の生徒への対応 ・「先生が適切な指導を行っている」と回答で否定的な14.5%の保護者への対応 ・問題行動に対する指導体制が整備されていないと回答されている教員の数20%の改善 ・部活動と関係なく、松崎中学校の全生徒が、少し視野を広くして、地域活動や小学生とかかわりを持つことはできていないと思われます。 ・長期欠席者の中で、心因性で悩んでいる生徒や保護者が、心が癒される場に一步步み出て、元気を取り戻せるようになるには、その受け皿になる人なり機関なりが、地域には少ないのかもしれませんが。 ・やはり自尊感情を高めるには、他人との関わりや他人を大切にする心を育てることに学校行事や部活動をより活用すべきと思う。 ・長期欠席への対応。 ・問題行動に対する指導体制確立への教師の取り組み。	【改善策】 ・あくまでも適確で自主的な行動、考えができる生徒の育成が必要。 ・アクティブラーニングの成果がそろそろ見られることに期待。 ・PTAとして啓発活動や情報発信、情報交換を行っていく。 ・生徒の頑張りを認めてくれる先生、困っている時に十分対応してくれる先生、そういった先生の評価が高まることを期待しています。 ・不登校の生徒のつまずきに気づき、学校に自分の居場所を確保してあげてください。 ・「学び直し」ができる環境、別室登校、時差登校など生徒と関わりを持つ ・支援が必要な生徒の支援シートの作成。情報共有と特別支援委員会を立ち上げる。 ・個人に寄り添いながら、生徒の良いところ、好きなことを伸ばしてあげてください。 ・コロナ禍が続き、人間関係がますます希薄になっている現状ではありますが、その中でも、地域にあるボランティア活動や、小学生や幼児とかかわりを持つことができる居場所について、多くの保護者が見ているという松崎中学校のホームページで情報発信できると、1人でも2人でも関心を持って、一歩前に足を踏み出してもらおうことができるのではないのでしょうか。 ・やはり負担は大きいと思いますが、教師の関わりを増やすべきと思う。 ・直接関係者でないと難しい問題である。		

目標	アンケート番号			評価の観点	評価項目	取組と成果	各観点 の評価	目標達 成度	課題・改善方策	
	生徒	保護者	教職員							
開かれた・信頼される 学校づくり	①	①	① ②	①学校運営協議会	学校経営への意見反映	・CSディレクターを軸とした協議会を学期に1回開催した。 ・学校施設に関する協議を要望としてあげ、良好な教育環境整備に繋がった。 ・学校便り・HP等、保護者・地域に発信した学校情報をもとに熟議を行った。 ・高校教員を委員として迎え、異校種校等の現状を把握することができ、進路指導等教育活動に繋げることができた。 ・新型コロナウイルス感染症予防対策を講じた上での今後の授業・行事・部活動のあり方についての助言を随時反映させることができた。 ・「トライやる・ウィーク推進委員会」との連携により、松崎中ならではの「トライやる」を行うことができた。 ・次年度の学校経営方針について協議し承認を得た。	3	3	【課題】 ・学校運営協議会について、保護者理解を更に高める。 ・学校の現状に関する情報をさらに発信し、熟議に努める。 ・松中ブロックとしての連携 【改善方策】 ・HP、学校便り等による広報活動に努める。 ・PTAや地域の方と共に(コミュニティ・スクール)に関する研修を実施する。 ・小学校との情報共有の場を設定する。	
				②学校評価	PDCAサイクルの実行	・学校評価資料としてのアンケートを今年度からGoogle フォームを用いて、実施した。 ・校長による分析を、職員会議等で共通理解し、各部分掌において成果と課題を検討した。生徒、保護者、教師の結果については、3年間の経年比較を行い、現状の把握や学習指導及び生徒指導の改善に活用している。	3		【課題】 ・学校評価結果をもとに、各分掌で検討した内容を共通理解し、次年度に向けた具体的な学習指導・生徒指導を実施する必要がある。 【改善方策】 ・行事や研修会ごとのアンケートを活かし、次年度に向けて引き続き改善を図る。 ・学校評価の結果を共有し、本校の課題を見据えた年間指導計画等を組んでいく必要がある。	
	⑮		⑳ ～ ㉓	③保護者・地域との 連携	地域への公開、参観授業の実施	※新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、本年度は授業参観、オープンスクールは未実施 (保護者の学校行事への参加 R3年度 R2年度未実施、H31年度89.1%、H30年度86.3%)	2		3	【課題】 ・感染症対策を講じた上での学校行事の実施。 ・各家庭への情報発信の一層の工夫と促進。 (「学校は学校の情報を学校便り、学年便りやホームページ等」を通じて保護者に伝えている」 R3年度97.1%、R2年度93.7%、H31年度91.2%) 【改善方法】 ・学校行事等の実施の検討と工夫 (学年別開催、オンライン開催、内容の見直し等の工夫) ・情報機器の活用による積極的な情報発信 ・学校ホームページの工夫と適切、かつ、効果的な活用。 ・グーグルクラスルームによる配信の促進
					生徒、教師の地域行事への参加	・新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、地域行事はすべて中止となった。また生徒会本部役員による「追悼のつどい」への参加も感染拡大のため見合わせたが、ろうそくメッセージは実施した。(全国学力・学習状況調査「今住んでいる地域の行事に参加していますか」 R3年度31.8%、R2年度35.3%、H31年度42.3%、 ※R2年度は全国調査未実施のため、自校実施・集計による)				
					学校からの情報発信	・学校だより、学年・学級通信、保健だより等の定期的な発行、及び学校HPへの掲載。 ・学校HPリニューアルを機にタイムリーな情報発信につとめ、1月には2000人を超えるユーザーの閲覧があった。 ・学校だより、学年通信の掲示板への掲示。 ・学校運営協議会における、学校教育活動に関する情報提供と共通理解。 ・校区内3小学校地区会への出席と、学校教育活動に関する情報提供。				

学校関係者の意見	【良い点】 ・学校教育目標がわかりやすい。 ・学校はあらゆる媒体を用いられ情報の開示に努められている。 ・コロナの影響で様々な制限がある中、工夫をされた情報発信をされている。 ・コロナ禍で授業、学校行事、部活動など制限されることが多かったが感染予防対策を講じ運営することができた。 ・学校からの情報発信、学校評価アンケートの実施 - 地域は保護者に「開かれた学校づくり」を通じて連携を深める取り組み ・学校運営協議会の開催が1学期に1度ということもあり、その場での熟議は、なかなか難しいものがあります。そんな中で、2年生の先生方のお声かけで、1か月に1度「トライやるウィーク推進委員会」が開催されました。学校運営委員会メンバー数人がトライやるウィーク推進委員を兼任していたこともあって、連携する形で熟議ができました。その熟議を通して、地域と学校が結ばれて、互いにWIN WINの形で「トライやるウィーク」を終えることができたと思います。 ・コロナ禍で学校行事・部活動などの制限もありなが	【課題】 ・小学校からの学習の積み重ねが大切であるので、小学校との連携した取組が必要であると思う。 ・ニュースタイルの生活を求められている。このスタイルにマッチさせ取組むことが必要（非常に難しいが） ・保護者が学校に来る機会を増やしてほしい。 ・安全な教育環境の確保と防災意識を高める情報発信 ・保護者、地域との連携の自己評価が「あまり達成されていない」と回答されていること。コロナ禍交流の機会が少なかったからの自己評価と思っています。 ・中学校ブロックとすれば、池尻・花里・昆陽里3小学校を抱えることになりますが、松崎中学校のおひざ元である昆陽里小学校区を中心に、学校支援ボランティアなど、活発に進めることが必要です。コロナ禍もあって、松崎中学校の保護者には小学校区関係なく、ご協力いただける体制を作ることができていません。「人や学校のために一肌脱ごう」と思ったださる若い世代が減ってきていることも否めません。松崎中学校の生徒自身が、部活動でないと、ボランティアに出ていくことがない…ということも、一つの懸案です。 ・やはりコロナ禍で地域行事への参加、学校側の情報発信に工夫が必要と思われる。	【改善策】 ・情報開示等は、非常に難しいと思う。専属の職員がそろそろ必要なのかも（広報のみに特化した人材） ・小学校との連携を図る。参観実施の工夫 ・地域で今、求められている安全教育は、自然災害や交通災害等から命を守るための知識や実践力を学校が情報発信者となり、登下校の安全指導や見守り、不審者対応防災避難訓練等に、やっぱり学校は地域に欠かせない重要なところ。地域を巻き込んでください。 ・コロナ禍で地域との交流が少なかったが、ウィズコロナ活動を学校から発信してください。 ・高等学校では、学校教育施行規則の一部改正により、昨年からスクールミッションの策定が進んでいます。各学校ごとに、未来の社会を創造する人材を育成する3つのポリシーが求められています。グラジュエーションポリシー（卒業した生徒像）・カリキュラムポリシー（学習する内容）・アドミッションポリシー（求める生徒像）を生徒、保護者に示して学校教育を行うものです。最近では教師間で、「どんな生徒に育てたい」「どんな教育が必要」「生徒にどんなことを求める」が学年内の課題となっています。そう遠くない時期に、中学校でもスクールミッションの策定を求められる時期が来ると思います。 ・「保護者への積極的な声かけ」や、「おひざ元への声かけ」「部活動と関係なく、生徒に、地域へ出て行ってもらえるような仕組みづくり」が必要だと思います。 ・「盡己」賞を出す取り組みを再スタートできるといいですね。 ・オンラインの活用などで地域への情報発信や情報交歓の機会も必要。 ・ボランティア活動について、部活動単位だけではなく、個人で参加できるような取り組みの検討。
---------------------	---	---	---

※ 項目の評定については、生徒、保護者、教師のアンケート結果等から判断し評価する（ 4:達成されている 3:ほぼ達成されている 2:あまり達成されていない 1:達成されていない）

4 自己評価における特記事項

・生徒アンケート結果(全学年)の経年比較(R1→R2→R3) 「学校へ行くのが楽しい」 82%→75.8%→80.0% 「学校行事は楽しい」 91.2%→87.8%→90.1% 「授業はわかりやすく楽しい」78.6%→72.2%→85.1% 「先生は生徒の悩みや不安に対して相談にのってくれる」84.6%→83.4%→88.8%	・保護者アンケート結果(全学年)の経年比較(R1→R2→R3) 「子どもは楽しく学校生活を送っている」 86.2%→84.1%→85.9% 「子どもは学校行事に積極的に参加している」 92.5%→88.9%→91.5% 「先生は、授業の工夫に努めている」 76.8%→80.3%→86.6% 「学校に子どものことについて相談できる先生がいる」 65.3%→65.5%→71.1% ・保護者の期待度が高いと捉え対応することが必要である。 ・自己有用感をさらに高めるため、個々の生徒へのカウンセリングマインドをもとにした丁寧な対応や、授業改善の工夫が求められる。 ・講義形式の一斉指導型の授業を改善し、わかりやすく楽しい授業展開をすることで、「学習が楽しいから学校が楽しい」と感じさせるような工夫が必要である。
---	---